



アルゼンチンアリが県内初確認されました



2023年7月24日、新居浜市と生物多様性センターが実施しているヒアリ類を対象としたモニタリング調査で、特定外来生物に指定されているアルゼンチンアリが愛媛県で初確認されました。発見後直ちに新居浜市と連携して殺虫剤の散布を行い、誘引トラップを用いた調査を継続していますが、新たな発生は確認されていません。

(主任研究員 村上裕)

アルゼンチンアリとは？

アルゼンチンアリは南米原産のアリで、物資の移動に伴って非意図的に世界各地に分布を拡げています。1993年7月に広島県廿日市市で初めて確認されました(アジア初)。現在、西日本を中心に分布が拡大しています。四国では徳島県(2010年)、高知県(2023年)で確認されています。

アルゼンチンアリの特徴

- 毒針を持たない
- 体長2.5mm程度
- 高速でせわしなく動く(秒速4~5cm)
- 冬眠しない
- 複数の女王による驚異的な繁殖力



アルゼンチンアリのおもな被害

▼不快害虫

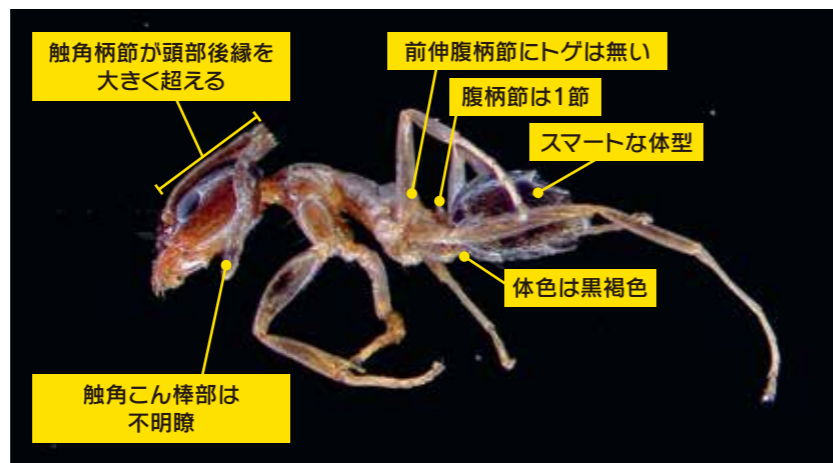
- 一被害例一
 - ・冷蔵庫に大量に侵入
 - ・インターホンの故障
 - ・家屋内への侵入と営巣

▼農業被害

- 一被害例一
 - ・アブラムシ保護による農作物被害
 - ・トウモロコシ、ワタへの被害

▼生態系への影響

- 一被害例一
 - ・在来アリ類との競争



お知らせ 愛媛県特定希少野生動植物保護管理推進サポーター制度(愛媛の生きもの里親制度)の創設について



「愛媛県野生動植物の多様性の保全に関する条例」に基づき指定された特定希少野生動植物については、県が保護管理事業計画を策定しモニタリング調査の実施や生息・生育環境の維持、改善等に努めていますが、生息環境が脆弱な種が多いことから、現在の生息地が気象災害等で消滅する危険性があります。

そこで今般、特定希少野生動植物について、生息地以外で保全する「生息域外保全」を、生物多様性センターが実施する保護管理事業の一環として実施するため、愛媛県特定希少野生動植物保護管理推進サポーター制度(愛媛の生きもの里親制度)を創設しました。

今後、対象種の選定や管理に対する留意事項等を定めたくうえで、本格的なサポーター募集を開始します。

編集・発行

愛媛県立衛生環境研究所 生物多様性センター
〒791-0211 愛媛県東温市見奈良 1545 番地4
TEL : 089-948-9678 FAX : 089-948-9677
URL : <https://www.pref.ehime.jp/h25115/biodiversity>
Mail : seibutsu-cnt@pref.ehime.lg.jp

編集後記

生物多様性国家戦略2023-2030の策定を受け、第2次生物多様性えひめ戦略の見直しが行われています。センターにおいても、県民参加型の保全活動の推進や愛媛の生きもの里親制度の充実など、新しい時代にマッチした取り組みや情報を発信していきますので、引き続き、皆様からのご意見や情報をお寄せください。

えがお 愛顔の生きもの 100年レター

愛媛県生物多様性
ニュースレター

vol. 14
(令和6年2月)

今治市に生息する希少なサンショウウオ《ゲイヨサンショウウオ》

カエルやサンショウウオなどの両棲類は有尾目、無尾目、無尾目の3群で構成され、サンショウウオは有尾目に含まれます。日本産の有尾目は3科6属58種が知られており、ほとんどが日本固有種です。国内のサンショウウオ科には、繁殖生態によって止水域に産卵するグループと山地の溪流に産卵するグループがあります。愛媛県には「イシツチサンショウウオ」、「イヨシマサンショウウオ」、「シコクハコネサンショウウオ」、「ゲイヨサンショウウオ」、「ナンヨサンショウウオ」の5種が分布しており、ゲイヨサンショウウオのみが止水域に産卵する種です。このゲイヨサンショウウオは、近年の研究でアキサンショウウオから細分化された種で、広島県と愛媛県に分布しています。県内の生

息地である今治市では12月下旬以降、産卵のために陸域から移動した成体が止水域で観察され始め、3月上旬から幼生が確認されます。幼生は7月下旬までには上陸し、陸棲生活を始めます。

ゲイヨサンショウウオは、生息環境が人間の生活圏内に近いことから、開発等の影響で絶滅が危ぶまれています。そのため、愛媛県野生動植物の多様性の保全に関する条例で特定希少野生動植物に指定され、捕獲等が原則禁止されています。現在、地域の住民、研究者、自然環境団体、大学生等が協力して生息地の保全活動に取り組んでおり、生息に適した環境が維持されています。

(主任研究員 成松克史)



写真 ゲイヨサンショウウオ 卵のう(左)、成体(右)、2020年2月撮影

<参考文献>

愛媛県 特定希少野生動植物保護管理事業計画「ゲイヨサンショウウオ」
Hirota S, Sugawara J, Naito J, Iwata T, Masahiro N (2022) Molecular Phylogenetic and Morphological Problems of the Aki Salamander *Hynobius akiensis*: Description of Two New Species from Chugoku, Japan. Bull. Kanagawa Pref. Mus. (Nat. Sci.), no. 51, pp. 35-46
日本爬虫両棲類学会 日本産爬虫両生類標準和名リスト(2023年12月15日版)



- 【特定外来生物1】 ヒアリ類およびアルゼンチンアリ対応状況(2017-2023)
- 【特定外来生物2】 ナガエツルノゲイトウ(特定外来生物)が確認されました
- 【愛媛の生き物紹介】 暗闇への誘い2 超洞窟型昆虫 アシナガメクラチビゴミムシ
- 【特定外来生物3】 アルゼンチンアリが県内初確認されました
- 【お知らせ】 愛媛県特定希少野生動植物保護管理推進サポーター制度(愛媛の生きもの里親制度)の創設について



ヒアリ類およびアルゼンチンアリ 対応状況 (2017-2023)



国内には約2,000種の外来生物が侵入しているとされています。生態系、人の生命や健康、農林水産業に重大な影響を及ぼす、または及ぼす可能性が高い種は、外来生物法において特定外来生物に指定されています。

生物多様性センターでは、第2次生物多様性えひめ戦略に基づき、県内の外来種対策の推進を図っています。2017年のヒアリ類の対応以降、原則として住民からの特定外来生物の情報提供は、市町担当部署を経由してセンターに届く体制となっています。2017-2023年度の特定外来生物対応のうち、アリ類(ヒアリ・アカカミアリ類、アルゼンチンアリ)に対する県内の対応状況について紹介します。

(主任研究員 村上裕)

1. ヒアリ類(ヒアリ・アカカミアリ)の確認と対応状況

(1) ヒアリ・アカカミアリのモニタリング開始

兵庫県でのヒアリ国内初確認を受けて2017年7月10日に海外航路を持つ県下4地点の港湾でモニタリング調査を実施しました(写真1)。モニタリング調査は台湾、ニュージーランドのモニタリング手法を参考に誘引トラップを用いました。

○場所: 松山港(松山市)、富田新港(今治市)、新居浜東港(新居浜市)、三島川之江港(四国中央市)

○方法: 誘引トラップ法、10m間隔、1地点あたり50基設置、設置日2017年7月10日

○結果: 5,211頭捕獲。オオズアリ属、シワアリ属を主な種構成とする在来種及び外来種を採集。

(2) アカカミアリ四国初確認【四国中央市】

2017年7月24日、県内業者よりコンテナ内で複数のアリが確認された旨、四国中央市に連絡がありました。同市職員が現地に向かい、センター職員が写真で判断したところ、体長にバラつきがあること、体表にツヤがあること、腹柄節が2節であること等が確認され、またコンテナの経路からヒアリを含むトフシアリ属の外来種である可能性が高いと判断。市職員に採集したアリを全て回収する旨を依頼しました。センター職員等が現場に向かいサンプルを回収した段階で、県、市、業者の連絡体制の構築と、初動対応の方法および役割分担について情報共有を図りました。



写真1 ヒアリ類モニタリング調査

(3) アカカミアリ確認【新居浜市】

2018年6月、新居浜市の港湾コンテナでアカカミアリ1頭が確認されました。これを受けて、新居浜港・東港地区及び周辺部(臨港道路植込部)を対象に1回/月の頻度で誘引トラップによるモニタリング調査を市と共同で実施することが決まりました。
注): 2020年以降は2回/年の頻度でモニタリングを行っています。



写真2 アカカミアリ(松山市・新居浜市、2020年)

(4) アカカミアリ確認【松山市・新居浜市】

2020年7月に松山市と新居浜市の港湾および同ルートのコテナ内部で計6,000頭のアカカミアリが確認され(写真2)、関係機関と連携して初動対応を実施しました。

注): 本県では2023年12月時点でヒアリは確認されていません。

2. アルゼンチンアリの確認と対応状況

アルゼンチンアリ県内初確認【新居浜市】(写真3)

2023年7月24日、センターと新居浜市が定期的に実施しているヒアリ類確認調査で、アルゼンチンアリの特徴を有している働きアリ19頭が確認されました。翌25日に発見箇所付近を中心に再調査を実施し、新たに働きアリ65頭を捕獲。同年7月27日に確認箇所を中心にベイト殺虫剤(フィプロニル剤)を設置し、効果測定のために誘引トラップを用いたモニタリングと、周辺分布の確認調査を実施しました。



写真3 アルゼンチンアリ(新居浜市、2023年)

① 発見場所におけるベイト殺虫剤処理実施後のモニタリング調査(2023年)

○場所: 新居浜港・東港地区の臨港道路植込部分 延長58m

○方法: 誘引トラップ法(設置数8-15基) 調査日 7/31、8/7、8/21、8/30、9/25、10/26

○結果: 7/31に1頭捕獲されたが、以降の調査でアルゼンチンアリ捕獲なし。

② 周辺分布確認調査(2023年)

○場所: 新居浜港・東港地区及び周辺部

○方法: 誘引トラップ法・目視調査 調査日 7/27、7/31、8/7、8/21、8/30、9/25

○結果: アルゼンチンアリ捕獲なし。当該地域では発見場所の植込部分に限定されると判断。



ナガエツルノゲイトウ(特定外来生物) が確認されました。



今治市の小河川において、特定外来生物に指定されているナガエツルノゲイトウ確認の情報提供がありました(県内初確認)。ナガエツルノゲイトウは南米原産の抽水～湿生の多年生草本で、爆発的な繁殖力から強害雑草として世界各地で問題となっています。本種は千切れた茎の切片からも繁殖可能で、草刈り機等での除草はかえって繁殖を助長させてしまう可能性があります。現在西日本から関東にかけて分布が拡大している状況で、四国内では徳島県と香川県で定着が確認されています。今回、センターが周辺調査を実施した結果、現時点では小規模な群落が河川内に確認されているのみで定着初期段階と考えられます。

蔓延してしまった場合は、防除に莫大なコストが必要になることから、発生初期の迅速な対応が重要です。

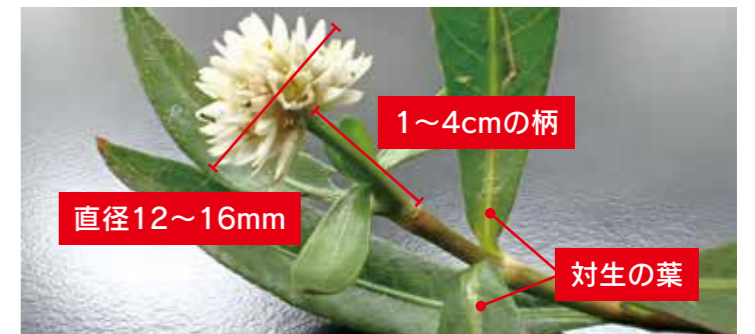
(主任研究員 村上裕)



河川での生育状況(2023年12月14日撮影)



茎には空洞があり、節から容易に千切れて活発に再生する。



春から初冬にかけて細い柄の先に球状の白い花をつける。国内系統は種子をつけない。

愛媛の生き物紹介 暗闇への誘い2 - 超洞窟型昆虫 アシナガメクラチビゴムムシ -

四国地方は各地に石灰岩が分布し、その地下には雨水と地下水による浸食で洞窟ができています。前回ご紹介したメクラチビゴムムシは、地中の隙間を移動していると、偶然洞窟に辿り着くことがあります。1cmほどの飛べない彼らにとって、洞内はとてつもなく広く、エサに出会う機会も減少し今までより生活がしづらくなります。

それでも、この新天地で何世代にも渡り暮らしていると、脚や触覚が細長く変化し、長距離を歩いてエサを探せるようになります。この様に特殊化した種類はアシナガメクラチビゴムムシと呼ばれ、洞窟環境に最も適応した超洞窟型昆虫と言われています。

国内では四国カルストに生息するものがあり、愛媛県RDBに掲載されている希少な生き物です(写真)。昨年末、これまでメクラチビゴムムシが知られていなかった沖縄から新種の超洞窟型種が記載され、話題になっています(Sugaya et al., 2023)。(研究員 原有助)

Sugaya K., Kakizoe S., Ooka S., Tamura H., Sone S., 2023. Discovery of a troglomorphic trechine beetle from the Ryukyu Archipelago, Southwestern Japan (Coleoptera: Carabidae: Trechinae). Acta Entomologica Musei Nationalis Pragae 63(2): 323-340.



写真. アシナガメクラチビゴムムシ *Nipponaphaenops erraticus* S. Uéno, 1971 日本を代表する超洞窟型昆虫。“erraticus”の意味は“さまよう”。生息地ではよく洞内を放浪している。